

森鷗外の医学情報の受容

山田 栄官

東京慈恵会医科大学 学術情報センター図書館（司書）

本発表では、文豪であり陸軍軍医として国内の医療制度の設計に中心的に携わった森鷗外（以下、鷗外）が、どのように当時の医学情報を受容し、陸軍軍医としての彼の思想的な基盤を構築したか、主にドイツ留学時の関心や動向を、参考資料¹をもとに整理し報告する。また、ドイツ留学を経た鷗外の医学情報の受容のあり方と、その後の脚気論争における彼の立場との関係性を説明することも射程に入れる。

鷗外は東京大学医学部を卒業後、陸軍軍医の立場で留学を志願したことを契機に、陸軍医事調査と衛生学研究を目的として、1884年に陸軍省よりドイツへの国費留学を命じられた。1884年ベルリンに到着した鷗外は、その後ライプチヒに移り、ライプチヒ大学のホフマン教授に師事し衛生学の基礎を学んだ。翌1885年にドレスデンに移った際には、ザクセン軍医監のロートに師事した。ドレスデン軍医講習会は欧州のなかで随一の質の高い講習であり、本来であれば受講するためにはザクセン国王の許可が必要であったが、ロートの厚遇を受けたことで、鷗外は軍陣衛生学を受講する機会に恵まれた。1886年にはミュンヘンに移り、ミュンヘン大学のペッテンコフ教授に師事した。この時期に、「ビールの利尿作用について」という研究テーマを追究するべく、鷗外自身も被験者となりビールに含まれる成分のうち利尿作用がある成分を特定すべく尽力した。1887年から1888年にかけては、北里柴三郎の紹介でベルリン大学のコッホの研究室に入った。1888年ドイツ留学から帰国した鷗外は、陸軍の上司にあたる石黒忠恵の指示で、『陸軍衛生教程』（1889年）を執筆したことに端を発して、小池正直とともに『衛生新編』（1897年）を、さらに講演録として『衛生学大意』（1907年）を出版し、衛生学を学問的に体系立てることに貢献した。

以上に述べた、ベルリン、ライプチヒ、ミュンヘンでの滞在期間において、鷗外は軍医となった当時から一貫して関心を抱いていた栄養学の調査を継続するなど、ドイツ留学中に旺盛な研究意欲を発揮した。鷗外が所属した東京大学医学部や陸軍においては、脚気は細菌による伝染病が原因であるという言説が権威を有していた。ドイツ医学を中心的に受容していた鷗外もこの説を支持する形で、当時日本の軍隊における兵食として導入されていた白米を主食した食事で栄養上の問題がないことを、1886年に掲載された「日本兵食論大意」で示しており、脚気対策の主眼を病原菌の発見に据えた。しかし結果的には、日清・日露戦争において多数の脚気患者が発生する事態となり、鷗外は彼自身が従前より唱えていた脚気対策の妥当性の問題と切実に向き合うこととなる。1907年に陸軍軍医総監、陸軍省医務局長に就任した鷗外は、脚気の原因を究明することを目的とした臨時脚気病調査会の初代会長や委員長を担う等、最終的に脚気の原因がビタミンBの欠乏にあるという説を確立したこの調査会と関わり、彼自身の関心や責任と生涯を通じて真摯に向き合い続けた。

¹ 本抄録を記すにあたっては、文京区立森鷗外記念館 平成27年(2015)度特別展「ドクトル・リンタロウ 医学者としての鷗外」展覧会図録を主に参照している。